

Female genital tract の収縮を再考する

非妊娠時におけるヒト子宮収縮の観察(2)
授乳期における子宮の収縮

木戸 晶 / 大堂 さやか

Summary

妊娠後授乳中のMRIにおける子宮像は、内分泌環境の変化により未妊女性の像とは異なり、全体に小さく、内膜やjunctional zone(JZ)は菲薄化し、T2強調像における信号は高い傾向がある。また、子宮蠕動も未妊女性に比べて頻度は有意に少なく、収縮があっても弱い。ただし、授乳前後における変化はなく、月経再開群 / 未再開群との差は認められなかった。授乳期の子宮は形態、機能ともに未妊女性のものとは大きく異なりこの時期としての正常像の認識は重要である。

Key words

子宮蠕動
MRI
授乳期

はじめに

妊娠により著明に伸展された子宮は、出産、授乳の過程を経てダイナミックな形態の変化を示す。子宮復古が授乳により促進されることは周知であり、授乳中におそらくは子宮の収縮によるのだろうと思われる下腹部痛の症状のあることは知られている。しかし、実際に子宮がどのような像を示しているかは検討されていなかった。また、遺残胎盤や産後出血などのトラブルがなければ、産後直後にMRIを撮像される機会はまずないが、産後しばらくしてから授乳中患者の子宮のMRI像をみると、とても年齢相応とは考え難い、むしろ、閉経後のような萎縮した像をみることは少なくない。本稿では、授乳期のMRI画像における授乳期子宮の形態と蠕動(収縮)の特徴を述べる。

授乳期の子宮の形態と収縮

MRIで観察される子宮の収縮には2種類知られており、子宮筋層の散発性収縮である持続的収縮(sustained contraction)と子宮内膜筋層境界におけるさざ波様の子宮蠕動(uterine peristalsis)がある。Sustained contractionは、3～5分程度の間隔で規則性をもたない、筋層全層に及ぶ持続性の収縮で、超音波やMRI画像では筋腫や腺筋症との鑑別が問題となる¹⁾。MRIにおいて収縮部分はT2強調画像において、一過性に低信号を呈し内膜側へ膨隆する。これに対し、uterine

Aki Kido

京都大学医学部附属病院放射線診断科

Sayaka Daido

国立病院機構京都医療センター放射線科